ニュースレター
かけはし
vol. 13
2013年1月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

目次

寄稿：留学体験記 (吉江 弘和) 1-2
わが街／学科紹介：木とPhDの静かな街 (大森 万理子) 3-4
寄稿：日本の会社員からアメリカの大学教員へ (川尻 義章) 5-6
連載：(5) 文章の書き方 (小野 雅裕) 7
寄稿：無謀な母親の予想外の長い道のり (宇澤 里絵) 8-9

寄稿：留学体験記

Harvard University
吉江 弘和

ハーバード都市伝説

世の中いたるところに「都市伝説」は存在する。それはHarvard urban legendとしてこの大学にもある。ネッシーでもマックのミミズでもない。ハーバードに入学してきた学生の多くが一度は考える「自分は他の学生と比べてバカだ。入学審査の手違いで間違えて合格したんだ」というものだ[1]。そんな僕も、日本からやってきてすぐの1年目はその都市伝説を信仰しきっていて、とても惨めな日々だった。と同時に、自分が学問で生きてくことの意味を真剣に考えさせられた時期でもあった。

僕は2010年9月からハーバード大学院の博士課程で東アジア史、特に日本の近世（江戸時代）・近代の社会史・文化史を専門にしている。専門とはいっても、卒業に7-8年かかるといわれる僕の学科での最初の2-3年は博論研究どころではなく、授業をたくさんとり膨大な量の宿題と授業での議論を毎週こなしていかなければならない。一学期に平均4クラス履修するのだが、例えば一番最初の学期にとった授業の1つ「近世日本史学の歴史」は、日本の江戸時代の歴史が、英語圏の学者のなかでどのような問題意識を中心に研究されてきたかという内容である。

日本で生まれ育ち、日本史にはアメリカ人や他の国の留学生よりはよっぽど精通しているはず、8人程度のクラスで唯一の日本人であることなどを生かした独自な視点や解釈を語りまわりをあっと言わせてやる。なんて書きながら赤面するようなことを最初は思っていたが、そんな根拠のない自信は1週間もせずに崩れ去った。毎週課される宿題を読んできてそれについてみんなで各回3時間議論しあうのだが、その宿題が学術書にして毎週平均4冊程度である。他の3クラスも同様に宿題があるのに、週4冊も、しかも英語で読めるわけがない。無理やりかいつまんで読んではみても、そんな適当な飛ばし読みでは本全体の議論さえよくわからず、クラスに行ってもみんなをあっと言わせるどころではない。しかし他の生徒達といえばまさに口角飛沫、延々と激しく意見をぶつけ合っているのには圧倒された。全く発言できないのが気まずいのに加え、生徒の言ってることが理解できない（これには発言者自身も多くの場合的を射たことを言えてないからだと、最近になってわかった）。でも議論が理解できてないと悟られるのが恥ずかしくて、誰かが発言したりギャグを言ったら僕も頷いたり笑ったりした。もはや独自の解釈の提供どころではない。自分に発言を求められないことをひたすら祈りながら3時間という時間の長さをいつも呪っていた。

動機の転換

自尊心はぼろぼろで悲惨な日々だった。大学では常に一番でいられたのに、ここでは周りの院生と比べて自分がどんなにバカなことか。そうなって初めて、なぜ学問を人生に選んだのかということを真剣に考えるようになった。それは、どうして米国留学をしたかという問いとは違う。日本から日本史を勉強しに米国に行くと決断してから、「どうしてわざわざ」と日本・アメリカにおいて何十回も尋ねられてきたこともあり、それについては自分なりに考え抜いていた[2]。このとき必死に悩んだのは、「日本か米国か」ではなく、「学問

1) http://news.harvard.edu/gazette/story/2010/05/sparking-a-passion/

2) 資金の豊富なアメリカの大学院は博士課程学生への授業料・生活費の財政援助が充実しているため学生は基本的にローンを組まずに卒業できる。
また日本の日本歴史研究は歴史資料の精緻な読解とそれによる歴史事実の解明に重点がおかれているのに対し、米国では歴史資料を理論的（例えば近代化や植民地主義）にどう解釈していくかという問題意識が先行している。どちらが良いと言えるものではないが、僕はアメリカ的な日本史研究を通して理論的に考えることがしたかった。

の人生でいいのか」というより本質的な問いだった。はじめは読書が好きで好きで打ち込んだ日本での大学の勉強も、いつの間にか好成績を取って一番になることの気持ちよさのために勉強してたのではないか。それがハーバードに来て逆転、一番になる楽しさなんて不可能となったときになって初めて、歴史を、学問を学ぶこと自体を楽しんでいないことに気づいた。

つまり、これからどう生きていくべきか完全にわからなくなっていた。カウンセラーや住んでた寮のお世話係である先輩学生（Resident Advisor (RA)という）など、たくさんの人に相談した。似たような状況の人はたくさんいるようで、大学が院生用に企画している「人生の意味とは何か」というすごい名前の3ヶ月に及ぶグループ討論会的なものにも参加していた。と同時に、日本の法科大学院の案内を取り寄せたり、最近の就職状況を調べたりなど、学術以外の可能性もさりげなく探っていた。そうこうしながらわかってきたことは、僕がハーバードの博士課程で、そして卒業後学問で生きていくためには、学び研究することのきっかけを外的動機から内的動機へ転換しなければいけないということだった。つまり成績などの、自分に対する他人の評価よりも、自分自身が楽しみ、充実感を得るかどうかを学問の動機とすること。

もちろん自己が他者から完全に乖離して成り立つわけはないため、動機における「外」と「内」の区別はいうほど簡単ではない。それでもこの転換の努力のおかげか、今は少なくともかなり「現在志向」となった。大学時代は、良い成績をとって認められて、良い大学院へ行って、と常に未来への目標のために行動してたが、最近は将来のこともある程度はふまえながらも、その時その時の自分が何をしたいかという感情に敏感に反応しようとしている。学者としてのキャリアに全く関係ないこと、例えば週2回サッカーもするし、赤の他人の犬の散歩のボランティアもしている。そして昨年度からずっと寮で上記のRAとして働いてもいるので、友達の幅が圧倒的に広くなった。

学者としての成長

自己の感情へ敏感になることの必要性は学問においても当てはまった。ハーバードで危機に陥って初めて、自分は歴史学、特に日本史の何がしたくて勉強しているのかを問い詰めた。自分の研究に対する問題意識はどこにあるのかをはっきりさせるために1年目後の夏休みの3ヶ月は研究もせずにいろんな分野の学術書を必死に読みあさった。指導教授もそれをとがめることなく暖かく見守ってくれ、ことあるごとに貴重なアドバイスをいただいた。そのおかげで、自分は本当は日本史の何に興味があるのかがはっきりした。これが意味するのは研究の方向性が定まったというだけではない。膨大な量の毎週の宿題で自分の専門と直接関係ないことが扱われていても、自分の持つ学問的問題意識を軸に取り組むことができる。そのためかいつまんで読む場合も何をどうかいつまむべきかの技術も身についた。授業の議論でも、独自とはいかなくても、自己の問題意識に沿った発言をできるようになった。今年は学会発表も2つある。全体的に学ぶことに積極的になり、学者の卵として日々成長しているのを実感できる。

RA達と企画した新寮生歓迎のアイスパーティーでの一枚。仮装のテーマはアメリカ禁酒法時代（1919－33）という日本人の僕には全くぴんと来ないものだった。

もちろんいいことばかりではない。今年の5月には博士課程の最大関門の1つである総合試験 (General Exam) がありそのための勉強でここ最近神経はすり減るし、それに加え今年度から教授の助手（Teaching Fellow）として専門と全然関係のない「中国古代哲学」を教えることになって、自分の受け持つミニ講義の準備や試験の採点で試験勉強や研究に思うように没頭できない（ただ僕の学科ではこれをすれば3、4年目は授業料と生活費が全額もらえるのでほぼみんなやる）。それでもやはり、学問的な軸がある今は「自分はとにかくバカだ」という都市伝説や「何のためにこれをしてるのか」という人生の大きな問いに悩まされずに満足のいく生活を送れている。3年目にしてやっと大学院生っぽくなったと実感する。こんなだらだらした回り道が許されたのは、最初の数年は専門に縛られない授業をとり、本格的な博論研究の開始が遅い傾向のある米国の大学院のおかげなのかもしれない。

本記事では、留学における個人的な精神的な紆余曲折が中心となり、アメリカで東アジア研究や歴史を学ぶことの特徴や制度、また極めて充実した奨学金制度などについてはあいまいな点が多いかと思います。読者の方でご質問などがあれば是非ご連絡ください。

吉江 弘和
ハーバード大学
東アジア言語文明学科博士課程
日本史学専攻
hyoshie@fas.harvard.edu

わが街／学科紹介：PhDと木の静かな街

Claremont Graduate University
大森 万理子

私は2011年の秋からカリフォルニア州のクレアモント大学院（Claremont Graduate University、以下CGU）に留学しています。この記事では静かで治安が良く、日本人が留学するにはもってこいのクレアモントの院生生活をルポします！

クレアモントって・・・どこ？

CGUがあるクレアモント市は、LAダウンタウンから30マイル、ロサンゼルスの東の果てに位置していて、お隣のサンバナディーノ・カウンティーと接しています。クレアモントは「木とPh.Dの街」と呼ばれるに相応しく、学生を中心とした静かで平和な街です。キャンパスの周辺は閑静な住宅地といった雰囲気で、綺麗なガーデンを構えた可愛らしい家が並んでおり、ハロウィンやクリスマスの季節にはそれぞれの家のデコレーションを楽しむことができます。キャンパス内にも所々、噴水があしらわれていて、ペーパーに行き詰ったときはキャンパスの周りを散策してリフレッシュするのが私の定番です。大学院を選ぶ際にプログラムやファカルティが最も重要な基準であることは言うまでもありませんが、生活していく上で地域の安全性は非常に大切な要素です。静かで治安が良いという点でクレアモントは日本人の学生にとって、とても勉強しやすい環境が整っていると言えます。

キャンパスには噴水があしらわれています。

古い歴史を持つクレアモント・カレッジズ

クレアモントにある学校はCGUだけではありません。CGUを含む2つの大学院と5つの大学でクレアモント・カレッジズを構成しています。それぞれ独立した学校ですが、7つの大学・大学院が街の中心に集まって一つのキャンパスを共有する形をとっており、イギリスのケンブリッジ大学やオクスフォード大学のカレッジ・システムに倣っています。コンソーシアムという機関が7つの大学を統括し、図書館や大学病院等の主要な設備を共有しています。それぞれの大学がダイニング・ホールを持っており、その日の気分で好きな大学で食事をすることができます。CGUは大学院のみで学部生の授業がないため、CGU内では他の州立大学のようにTAとして働くことができません。その代わり、CGUの院生はクレアモント・カレッジズの教授のRAや学部生の授業のTAをする機会を見つけることが可能です。CGUのお隣のポモナ大学は日本語学科があり、私はパートタイムで週に4コマの漢字のクラスを担当しています。

数年前、日本でベストセラーになった『もしドラ』こと、『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』。経済学の巨匠ピーター・ドラッカーの名前はこの本のおかげで日本では一般にも知られるようになりました。CGUはドラッカー自身が教鞭をとっていたドラッカー・スクールがあるため、MBA取得を目指す日本人に人気です。ドラッカーは晩年をクレアモントで過ごし、100歳を超える奥様は未亡人になった今でもクレアモントに住み、スーパーで元気にお買物しているのだとか。

自転車に乗ってどこまでも
～世界一小さな自転車屋さん～

ご存知の通り、車社会のアメリカ。「車持たないなんてあり得なーい！免許とりなよ。」とルームメートに言われながらも、私は「エコ・フレンドリーですから」と言って未だに車を運転していません（本当は猛烈なスピードで行きかう車の中、ロサンゼルスの6、7車線はあるフリーウェイを運転する勇気がないだけ）。そうは言っても、クレアモントはロサンゼルスの東の最果て、ダウンタウンに用事があるときはどうやって行けばいいのか？幸運なことにクレアモントからダウンタウンのユニオン・ステーションまでメトロリンクという名の電車が通っています。一時間弱の移動は短くありませんが、車窓を眺めながらの電車の旅が好きな人にはもってこいです。

普段の生活では自転車を移動手段に使っています。クレアモントに着いて最初の買い物の一つが自転車でした。ところが、オンラインで買ったため家に届けられたときに部品は分解された状態で、自転車の組み立てに初挑戦する羽目になりました。何とか完成させて近くの自転車屋さんにタイヤの空気を入れるため持って行くと、「あー、タイヤのフレーム逆向きに付けてる！ネジも緩いから締めとこうね。」と気のいいオーナーのおじさん。このお店、「世界一小さな自転車屋ベロ」という名に頷ける程小さく、閉店時には10数台の自転車が畳み二畳程度のガラス窓のお店に器用に収まってしまいます。また、クレアモント・カレッジズにはグリーン・バイク・プログラムという自転車の利用を推進するプロジェクトがあります。要らなくなった自転車の寄付を募り、定期的に抽選を行って希望者に自転車を無料で配布しています。クレアモントは自転車に優しい街作りがされていて、街の南側にはバイク・トレイルが通っていて、天気の良い日はサイクリングに出かけることもあります。

サイクリングに最適なバイク・トレイル

マックが無い？！

キャンパスのすぐ南にはクレアモント・ビレッジと呼ばれる様々なお店やレストランが立ち並ぶエリアがあります。街の中心部なのですが、ここにはスタバとコーヒービーン以外、ほとんどチェーン店が無いことに初めは驚きました。アメリカと言えば誰しも思い浮かべるマクドナルドやサブウェイ、KFCのようなファーストフード店が無いのです。その代わり、ヨーロッパ風のレストランやカフェがオープンテラスのお店を出していて、おじいちゃんやおばあちゃんがお喋りに花を咲かせます。様々な種類のお茶葉を揃えたティーハウス、お昼のサンドイッチが美味しいチーズ専門店、20種類近くのベーグルが目玉のカフェ、地中海料理、インド料理、ギリシャ料理のレストラン、雑貨屋さん、アンティークショップ、街角の小さな映画館、秘密の路地に隠れた謎の駄菓子屋さんKenta（オーナーは日本フリーク）等々、ビレッジを散策するたびに新たな発見があります。

学科紹介：カルチュラル・スタディーズを学ぶ カルチュラル・スタディーズとは

カルチュラル・スタディーズの特徴は文化の中でも特に対抗文化（カウンター・カルチャー）に重点を置いていることです。主流文化に対立する文化は様々ですが例を挙げると、白人vsマイノリティ、男性vs女性、中流階級vs労働者階級、大人vs若者、グローバルvsローカル、ハイカルチャーvsポップカルチャーなどがあります。人種、階級、性といった問題がいかに日常生活の中に組み込まれ、権力と結びついているかということを思考するのがカルチュラル・スタディーズです。私たちが日常的に触れているニュース、バラエティ番組、マンガや音楽の中で、女性/男性、大人/子どもといったイメージが刻み込まれています。テクストを通して知らず知らずのうちに社会観や価値観を形成させられている…カルチュラル・スタディーズはそうした具体例を教えてくれ、常に新しい発見をさせられます。学問横断的な研究手法をとるため、他の人文学系の学問領域とは親和性が高く、他学部から多くの学生が授業に参加しています。

他の学科、学校で授業を受ける

CGUのカルチュラル・スタディーズそのものは大きくなく、同学年は15人程で授業は少人数で行われます。CGUの強みの一つは他学科の授業を積極的に受けることでコースワークを充実させられることです。例えば私の研究領域は日系移民史、写真や絵画における日系人の表象に関心があるため、CGUの歴史学科の授業を受けました。また、多くのファカルティがクレアモント・カレッジズ間で兼任しており、お隣の大学の教授がCGUで院生向けに開講する移民史の授業を受けたりすることも可能です。CGUでお気に入りの教授が授業を持っていない場合でも、カレッジ間で単位の互換は比較的容易にできます。CGU内だけでなく7つの大学の中から自分にあった授業を受け、教授に研究について話を聞いてもらえるというのはクレアモントならではのことではないでしょうか。

リトルトーキョーでのインターンシップ

私のプログラムではミュージアム・スタディーズをConcentrationとして修士号を取得することができます。ミュージアム・スタディーズを同時に取得する場合、博物館、美術館、あるいはそれに順ずる機関で100時間のインターンシップが義務付けられています。私は夏にリトルトーキョー歴史協会でインターンシップをしましたが、日系の歴史史料に触れることができたのは言うまでも無く、日系のコミュニティに参加する機会ができたことでネットワークが拡がりました。インターンシップを終了した今でも、月例のミーティングに参加し、コミュニティのイベントがあればボランティアとして参加しています。日系人の歴史を二世や三世の方から直接聞けるというのは今までの本から学んだ知識とは異なる感触で、リアリティを持って響きます。

カルチュラル・スタディーズが見えていなかったものを見せてくれるように、クレアモントでの生活は新たに知ること、学ぶことに溢れています。住めば都の言葉の通り、私にとってクレアモントは第二の故郷となりました。

大森 万理子
クレアモント大学院 カルチュラル・スタディーズ専攻

寄稿：日本の会社員からアメリカの大学教員へ

Georgia Institute of Technology
川尻 義章

私はジョージア州アトランタにあるジョージア工科大学(Georgia Institute of Technology)において、化学・生体分子工学専攻(School of Chemical & Biomolecular Engineering)のAssistant Professorとして勤務しております。私の研究分野は化学工学で、特に効率的な化学、エネルギー生産システムの設計や運転を専門にしています。

帰国子女でもない純日本人の私が何故アメリカの大学で教員をすることになったのか、そしてアメリカの工科系大学で教員の仕事はどんなものなのか、皆様に簡単にご紹介したいと思います。

日本の大学卒業後、日本の会社へ

私は日本の大学を卒業した後、同じ大学の修士課程に進みました。修士課程での研究は非常に楽しいもので、自分の研究を継続すべく博士課程に進学したかったのですが、学費と生活費をまかなわなければならないという経済面、そして民間企業への就職にむしろ不利になってしまうというデメリットを考えて進学をあきらめました(この時点で、これらのデメリットがアメリカという国では存在しないことには少しも気づいていませんでした)。

修士号取得後、民間企業の研究所で働くことになりました。そこではアメリカやヨーロッパの会社の人たちと接する機会に恵まれるのですが、これら海外の会社では重要な役職に就くほとんどの人たちが博士号保持者であることに気づきました。彼らは専門分野における知識だけでなく、それに裏打ちされた迅速な意思決定や効率的なコミュニケーションに長けており、自分との圧倒的な差を感じました。

こうして海外の大学院に興味を持つことになり、アメリカの大学院に応募することになりました。学位取得後の就職が心配でしたが、アメリカの工学系でPh.D.を取得した外国人は卒業後ほとんどがアメリカ国内に就職していることを知りました。更に在学中は学費に加えて生活費も支給されることを知り、日本とのあまりの差に愕然としました。

アメリカの大学へ

会社の同僚達には内緒でアメリカの大学院への応募準備を始めました。夜遅く帰宅してからTOEFLやGREの準備をしたり、応募書類を準備するのは確かに大変でしたが、自分により合った進路に近づいている実感があり、楽しいばかりで辛い思いはしませんでした。

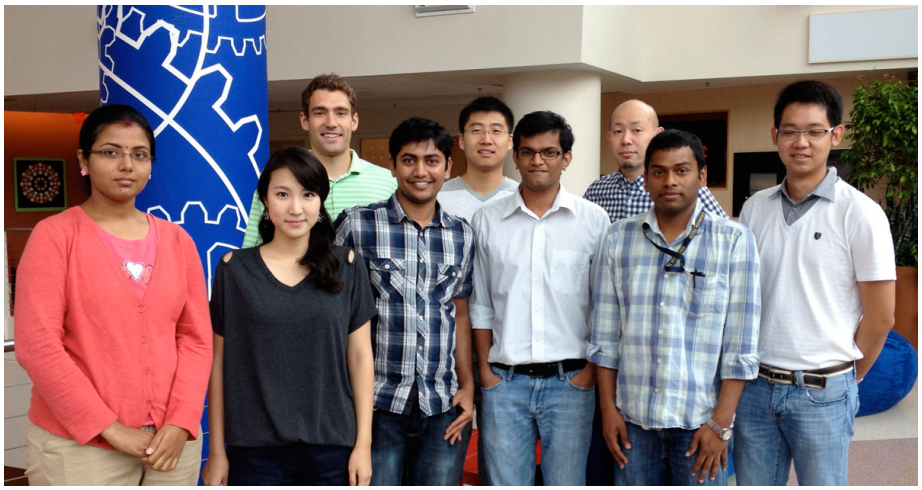
応募書類を準備するうちに気づかされたのは、職務経験はポジティブに評価されることはあれマイナスにはならないということです。アメリカでは年齢に重きをおかず(時に年齢差別は違法にも成りうる)、進路変更に寛容です。私も自分の応募書類の中で日本の企業の研究所で働いていることを強調しました。

幸いいくつかの大学から合格を頂いた中、ピッツバーグにあるカーネギーメロン大学(Carnegie Mellon University, CMU)に進学することになりました。CMUは私の希望していた研究分野であるプロセスシステム工学で世界有数の研究実績があり、選択にそれほどの迷いはありませんでした。入学後の学業と研究も非常に楽しいもので、無事に学位を取得することが出来ました。

アメリカでのポジション獲得、そしてドイツでのポスドク

もともと企業での職務経験がある私は、アメリカでも企業に就職しようと思っていました。しかし大学院での楽しい研究生活を送るにつれ、学位取得後もアカデミアに残りたいという思いが強くなっていきました。これは渡米直後には考えてもみなかったことでしたが、周りの学生や教授陣からの有難い励ましもあり、アメリカの大学でのファカルティ(教授)のポジションを探すことになりました。

アメリカでのファカルティポジション獲得は熾烈です。私の分野では、一つのポジションに対して100～200通の応募書類が届くのも珍しくありません。応募書類は教授陣にじっくりと読まれ、その



GeorgiaTechで主宰する研究室のメンバーたちと。

中でも特に有力だと思われる少数の人たちだけがキャンパスでのインタビューに招待されます。インタビューは通常丸2日程度を要し、主に以下の3要素から成っています。

（１）教授陣と個別面会。朝食、昼食、夕食も常に誰かと一緒で、人物像をじっくり観察されます。

（２）大学院生と教授を相手にした研究概要セミナー。大勢を相手にしたセミナーなので、緊張感があります。

（３）教授陣を相手にした研究計画の説明。どうやって独立した研究者として成功するのか、そのプランを問われます。ベテラン教授何十人もを相手に、自分がやったことも無い仕事をどう進めるかを話すわけですから、このプレッシャーは想像に難くないと思います。

一度こうした審査を経て大学側に優秀だと判断された人材は、非常にアグレッシブなアプローチを受けることになります。優秀な人材は他大学と取り合いになるので、彼らに良い条件を出して獲得しようと必死です。

更には、若手のファカルティに大きく成長してもらうことで大学の競争力を高めようともします。私の分野の一部の大学では、学位取得見込みの大学院生に対しポジションのオファー（内定）を出した後、着任の時期を1年から2年程度遅らせることを許可しています。これは、その空いた時間にポスドクとして修行してきてもらうためです。私がジョージア工科大学からファカルティのオファーをもらったときも着任を1年遅らせてもらい、その間にドイツのマクデブルクにあるマックスプランク研究所（Max-Planck-Institut für Dynamik komplexer technischer Systeme）でポスドク生活を送ることが出来ました。ドイツでは新しい分野での研究経験と、ヨーロッパの研究者達とネットワークを築くことが出来、非常に貴重な経験となりました。

ジョージア工科大学での毎日

ジョージア工科大学に就職してから4年以上が経過しました。現在の私の研究グループはPhD課程の学生が7人、ポスドクが2人と、アメリカの大学としてはそこそこの大きさになりました。今年の1月には私のグループから最初の学位取得者が出る予定です。

私の業務は自分のグループを運営することによる研究と、クラスの学生を教える2つですが、研究型の大学であるジョージア工科大学では前者により重点が置かれます。特に夏の3ヶ月間はクラスを教える義務が無い代わりに、給料は学校から支払われません。アメリカの大学での多くでは、夏の間の給料は自分が外部から獲得した研究費を充てることが出来るようになっており、研究費獲得の大きなインセンティブとなっています。

前述したとおり、アメリカの大学では博士課程の大学院生に学費と給料を出すのが普通ですが、このお金は大学から自動的に支払われるわけではなく、教授が外部から獲得してこなければならないのです。こうやってお金を探して学生やポスドクの食い扶持をつなぎ続けるというのは大きなプレッシャーで、まるで資金繰りに奔走する中小企業の社長のような気分です。特に最近のアメリカでは研究費獲得競争が年々厳しくなっており、ファカルティポジション獲得の際も資金調達能力をじっくり問われることが多いです。

この仕事を始めてから改めて気づかされたのは、学び続けることに終わりは無い、ということです。教授になってしまえば学生に教えるほうが主になり、学生のときほど勉強することは少なくなるのではないか、と思っていたのは大変な勘違いであることに気づかされました。私とは比べ物にならない実績を持った私の同僚教授たちでさえ、新たな学問のフロンティアを開拓するべく毎日切磋琢磨しています。このような刺激的な環境で研究者、教育者として少しずつ成長していく毎日は、非常に充実したものです。

最後に

帰国子女でもないごく普通の日本人だった私がアメリカの大学教員として働いていることをご紹介することで、留学やアメリカでの就職にご興味がある皆様を勇気付けることが出来れば幸いです。また、日本の大学を既に卒業されてアカデミアを一旦離れられた方にもご参考となれるのではと思います。

私の分野でアメリカの大学で教員をしている日本人は非常に稀なので、アメリカの教育や研究動向について日本の大学の先生方から質問を受けることも多いです。日本に一時帰国した際には大学や会社から講演にご招待いただく機会も増えてきました。このような形で微力ながら日本の皆様のお役に立てることは、私の大きな喜びとなっています。

ジョージア工科大学での当専攻に届く大学院への応募書類を見て、日本からの応募が非常に少ないのを残念に思っています。読者の皆様には是非ジョージア工科大学にもご応募頂ければ幸いです。また、私の研究グループでは時々ポスドクを募集しておりますので、ご興味のある方はホームページ（http://kawajiri.chbe.gatech.edu)をご覧下さい。

川尻 義章
カーネギーメロン大学博士課程卒業
ジョージア工科大学化学生体分子工学科、助教授

連載:The Philosophy of a Bohemian
(5) 文章の書き方

慶応義塾大学　理工学部
小野 雅裕

最近僕は様々な場所に寄稿する機会が増え、文章が上手だという有難い評価をいただくことがある。素直に嬉しい。しかし、「文才がある」と言われると違和感がある。僕にとって文章力とは生まれついた才能ではなく、スポーツや音楽と同じように、ノウハウを学び練習を重ねることによって後天的に獲得した能力だったからだ。だから、誰でも努力によってある程度のレベルに達することができるものだとも思っている。今回は、僕が考える文章を書くコツを五つ、お伝えしたい。

第一に、素直に書くこと。例えば留学体験記を書く際、白人や黒人たちと一緒に写っている写真を意図的に選んで披露しながら国際派をアピールするよりも、言葉や文化の壁に苦しみ友達がなかなかできなかった経験を隠さず語るほうが読者の心に響く。また例えば志望動機書を書くとき、あなたがガンダム好きだからロボット工学者を目指した人ならば、災害救助や老人介護に役立てたいと模範解答を並べるだけではなく、ガンダムへの愛も恥ずかしがらずに書いた方が説得力のある文章になるだろう。見栄や虚勢、照れや羞恥は、あなたを凡人に見せる効果しかもたらさない。読者の心の真ん中に届く言葉は、あなたの心の真ん中からしか生まれない。

第二に、文章にストーリーを持たせること。千ページの辞書を通して読む人はいないが、千ページの小説なら読めるのはなぜか。数年前の授業の内容は思い出せないのに、映画の内容ならば鮮明に覚えているのはなぜか。それは後者にストーリーがあるからだ。人間はストーリーを伴った情報に敏感であるようにできているのだ。だから、論文であれ、エントリーシートであれ、あなたの文章が人に最後まで読まれ、記憶されたければ、情報の羅列ではなく、ストーリーが必要だ。ストーリーはシンプルなものでよい。例えば論文ならば、「起:Aの問題を解くことはBの意義がある。承:過去にCの手法が提案されたがDという問題があった。転:そこで我々はEの手法を開発した。結:すると問題は見事に解決された。」こんな典型的なハッピーエンドのストーリーで十分である。

第三に、文章を短くすること。贅肉が人を醜くするように、余分な情報は文章を読みにくくする。ストーリーをぼかし、主張を弱める。しかるに人は大抵お喋りで、読者が読みたいこと以上に書こうとするものだ。文章を美しくするためには、贅肉を徹底的に削ぎ落とすに限る。もし字数制限があるならば、それをきっちり守ることから始めよう。字数制限がなくても、何度も推敲し、ストーリーを語る上で不必要な情報は段落ごとバッサリと削除する思い切りの良さが必要だ。

第四に、書く練習を積むこと。スポーツも音楽も練習なしには上達しない。文章も同じだ。僕はブログを練習の場として使った。英語も同様で、文法だけ学んでも書けるようになる筈がない。僕は修士論文と博士論文あわせて四百ページの英語で書いてはじめて、ライティングに僅かながら自信が持てるようになった。

第五に、本をたくさん読むこと。僕はこれが最も大切だと思っている。ただ読むのではなく、良書を読むことが大切だ。とりわけ僕は文学作品を読むことを強く勧める。文学とは文章の美術館である。もっとも卓越した、もっとも美しい、もっとも巧妙な文章の手本がそこにある。もちろん実用書の価値を貶めるわけでは決してない。ただ、「十日で身につく文章術」というような安易なハウツー本ばかり読んで文章力をつけようとしている人がいるなら、滑稽だと言わざるを得ない。それはベートーベンもビートルズも聴いたことのない人が、作曲法の教科書だけを読んで人を感動させる音楽を作ろうとするのと同じことだ。もしあなたが文章によって他人の心を少しでも動かそうとするならば、あなたの心が文章によって動かされた経験が必要だ。本を読んで涙が止まらなくなるほど感動に浸った経験が絶対に必要なのだ。

文学なんて理系の自分には関係ないと思う人がいるなら、ひとつ反例を出そう。僕が現在勤めている慶應義塾大学の学科では、学部4年生全員が夏休み前に自分の研究をプレゼン発表することが必須になっている。そして約120名の学生から数名の優秀者を選び、表彰する。昨年、僕の学生の一人がその賞を得た。彼は最近の理工系学生には珍しく、小説をよく読む子だった。これは決して偶然ではないと思う。プレゼンテーションを用いて考えを表現するスキルは、文章を用いて考えを表現するスキルと表裏一体であるからだ。

だからこの記事を読んでくれたあなたに、最後にひとつだけおせっかいなアドバイスをしたい。明日の通勤・通学時に、携帯電話でFacebookを見たりゲームをしたりする代わりに、駅のキオスクで文庫本を一冊買って読んでみてはどうだろうか。

小野　雅裕
マサチューセッツ工科大学航空宇宙工学博士課程修了
慶應義塾大学 理工学部物理情報工学科　助教

小野が薦める五冊: 谷崎潤一郎「春琴抄」、遠藤周作「深い河」、三島由紀夫「豊穣の海」、スタインベック「怒りの葡萄」、メルヴィル「白鯨」

本記事は全6回に渡って連載される記事の第５回目です。

寄稿:無謀な母親の予想外の長い回り道

University of Carifornia Davis
宇澤 里絵

私が植物生物学の世界に入ったのは偶然以外の何物でもありません。きっかけは　バークレーの街中で友達と知り合った事でした。

植物生物学との出会い

上の娘がまだ1歳の時、ベビーカーを押して歩いていると、疲れた顔をしてパン屋の前のベンチで座っている女性を見つけました。たまたま彼女と目が合うと、さっと立ち上がり、私の方に寄って来て、いきなり日本語で、“日本人の方ですか?”と、尋ねられました。一瞬、何が起こったか分からずに戸惑っている間もなく、彼女は間髪入れずに1週間前に日本からご主人の仕事でやって来た事、英語ばかりの生活で非常なストレスを感じている事、ついには、ストレスはすべてご主人の責任だと責めだしました。私もアメリカに来たばかりのころに同じような経験があったので、かわいそうになって私の家に連れて行きました。その日以来、彼女と仲良くなりました。

彼女のご主人はUCバークレーの植物遺伝学の博士研究員でした。彼女自身も植物生物学で修士を持っていて、後に技官として同じ研修室で働き始めました。2年後にご主人が研究のために日本に戻る事になりました。彼女の上司というのが偶然にも日本人の方で、私の主人の知り合いでした。その関係もあり、彼女の上司の方から私の方に彼女の仕事を引き継がないかと打診がありました。

中学で初めて英語を習い始めて以来、アメリカに行くのが夢でした。本当は外国語大学の英語科に行きたかったのですが、あまりにも競争率が激しかったので、諦めてフランス文学部に入学しました。4年間勉強して分かったのが、フランス語、特に文学にはあまり情熱がないということとやはりアメリカに留学したかったということでした。1年間英語を勉強して、アメリカのネブラスカにある私立大学が奨学金を留学生に出している事を知り、親に内緒で応募して通ってしまいました。元々アメリカで国際政治学を勉強して、日本に帰って会議通訳の仕事をしたかったのですが、主人と結婚してアメリカに定住してしまいました。こういう経歴なので、研究室で働いた経験どころか、理系の勉強を真剣にしたのは高校以来という状態で、単に研究室で働くのは面白そうという理由と、子供達の幼稚園代がアメリカでは大変高額で当時のうちの生活ではなかなか難しかったという金銭的な理由から仕事を引き受けました。今から考えると本当に無謀としか考えられない選択でした。今より若かったから出来たんだと思います 。

このような経緯で研究室での技官として仕事を始めたものの、最初の2年ぐらいは今から考えると本当に大変でした。全く実験もした事がなく右も左も分かりませんでした。周りも経験ゼロの私に関して懐疑的でした。家庭と仕事の両立も難しく、仕事から帰って、くたくたになり、帰り着くなり床の上に寝転がりそのまま30分ぐらい身動きできない事もよくありました。最初の1年ぐらいは植物の世話ばかりで実験も出来ませんでした。1-2年を過ぎた頃から、徐々に実験を教えてもらい、ハマっていきました。だんだん実験が出来るようになると生物の世界でなるべく長く仕事を続けたくなりました。そのためにはどうしても生物学を勉強しなくてはレベルの高い仕事は無理だと痛感しました。二人の子供が小さかったので教室に行くのは無理という事もあり、オンラインのクラスから始めました。後に私の働いている研究室の教授の了承を得て、仕事の合間に授業も取り出しました。生物学の勉強が面白くなり、次第に将来のため学位を取る事を考えだしました。最終的に決心するまで3年はかかりました。自分の年齢と能力、家族への負担、将来の展望が主な理由でした。私の研究室の教授は大変協力的で、色々と相談に乗ってもらいました。元々、良い意味でも悪い意味でも“無謀”なところがあり、自分の情熱の赴くままに、UCバークレーに出願しました。教授の尽力のお陰もあり、仕事を始めて9年後にようやく特別に修士で入学が許可されました。

大学院での苦労

喜びもつかの間、入学間もなく自分がいかに大学院の勉強に準備不足であるか思い知らされました。私の子供とあまり年齢も変わらない学生と勉強しなくてはいけませんでした。タイミングも悪く、自分の研究も入学直後に大変忙しくなった上に息子の学校の仕事も断りきれず、思うように勉強の時間も取れない状態が続きました。最初の学期の成績は散々でした。大学の方からは成績不良のため、警告の手紙を受け取りました。元々そう自信がある方でもないのに、この状況は私の少ない自信を完全に崩壊させてしまいました。一方でこの経験は自分を見直すきっかけともなりました。冬休み中考え抜き、たどり着いた結論は“未知の結果を恐れるより自分でやれる事をやってから結果を作ろう”という事でした。結果を恐れると、恐れる事に時間を費やすだけで何も出来なくなるという事に気付き、勉強の方法を変えたり同級生に助けてもらったりしてなんとか次の学期には成績を取り戻しました。

実は私の夢は9年間技官として働いた教授のもとで博士号を取る事でした。彼の研究には大変興味があったので続けたく再度博士課程に出願したのですが、最初の学期の成績が芳しくなかったため受けつけてもらえませんでした。結局修士で卒業するように大学側からいわれました。同じ時期に私の教授の長年の共同研究者であるUCデービスの教授に勧められ、UCデービスにも出願しま

した。数年前に共同研究の一環で彼の研究室で実験をしたことがあり、その時に非常に良い経験をさせて頂きました。ただ、彼の研究室に行く事は考えた事はありませんでした。というより自分の成績が悪いので引き受けてもらえないだろうと考えていました。なので、彼に勧められた時には本当にびっくりしましたが、またまた元来の無謀さが出て来てだめでもともとで受けてみました。

念願の博士課程入学

予想通り入学審査の段階であまり可能性がないといわれ諦めて修士卒業後の仕事を探していた頃、UCデービスの教授からもしまだ博士課程に興味があるなら彼の研究室に直接入学をさせてもらえる、と電話を頂きました。もう博士号の夢を完全に諦めていたので、この時は足が震えるほど嬉しかったです。こうして念願の博士課程に今年の9月から43歳にして入学しました。

こうして振り返ると我ながら色々ありましたがなかなか面白い経験をしたと思います。アメリカに来なければ、女性、43歳にしての博士課程入学はあり得なかったと思います。ここまで来るのには、数えきれない人たちから助けていただきました。辛い事も数えきれないほどありましたが、本当にうれしかった事も中にはありました。数で比べると辛い事の方が圧倒的に多いのですが、うれしかった事は私の記憶の中で光輝いてそれが私の起動力なっています。1週間前に博士課程最初の学期を終えました。勉強とテスト、2時間近くの通学, 家庭と勉強の両立は必ずしも容易ではなかったけれども、やりたい事をしている幸せを感じています。この陰には家族の多大な協力がある事を最後に述べて終わりたいと思います。

宇澤 里絵
カリフォルニア大学デービス校
植物生物学科博士課程

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

【ニュースレター編集部】
原 健太郎　石原 圭祐　高野 陽平
山田 亜紀　辻井 快
newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

当会は2012年12月に全国5大学で留学説明会を行いました。12月26日の慶應義塾大学での説明会の様子がYouTubeにアップロードされました。森亮さん、遠藤謙さん、桑田良昭さんの講演が収録されています。ご参加できなかった方、ぜひご覧ください。(http://www.youtube.com/playlist?list=PLBe_TIITFkIoK-GUe4QYB2pfGKv3mYe6Cu)

連載を執筆している当会代表の小野が東洋経済オンラインで隔週で連載を始めました。本ニュースレターの連載では書ききれなかった留学体験などに触れられています。こちらも是非ご一読ください。(http://toyokeizai.net/category/041)

2013年も米国大学院学生会をよろしくお願いします。（編集部一同）

ジョージアテックを卒業後、日本で就職して４ヶ月。始めはいろいろと不安もありましたが、全て杞憂に終わり、ジョージアテックで勉強したこと、自分の強み、それらを活かすことができる仕事に就けて嬉しく思っています。新しい生活のこともあり、今回、米国大学院学生会を引退することになりました。今まで小野さんやNL班の方々に大変お世話になりました。読者の皆様にも、ご愛読頂き、ありがとうございました。またいつか、お会いする日を楽しみにしています。(大勝)

ボストンはここ数週間凍りついていますが、今週末、うちのPhDプログラムではリクルーティングを兼ねた面接を行いました。生物系ではこのような形式をとるところが多く、教授との面接を終え緊張もほぐれたprospective studentsは、キャンパスツアーや現役生とのパーティーを楽しんで帰って行きました。いい学生を集めることは本当に重要です。（石原）

2ヶ月に1回の頻度で更新している本ニュースレター。毎回違う方に執筆をお願いしているものの、執筆者それぞれの独自の経験だったり考えが反映しているのが見えてとても編集していて楽しいです。随時、執筆者募集していますのでご連絡ください。（原）